

講演「次の東海・東南海・南海地震に向けて～子供たちに何を伝えるか」

講師：山岡 耕春 東京大学地震研究所教授

「次の東海・東南海・南海地震に向けて～子供たちに何を伝えるか」と題して講演が行われました。

講演内容は、次の東南海・南海地震の発生確率が最も高いと考えられる約 30 年後に社会を支えている今の小中学生を中心とした世代に何を伝えるかとなっています。以下にその概要を紹介します。

1. 「子供」とは

次の東南海・南海地震の発生確率が最も高いと考えられるのは約 30 年後であることが、地震発生の長期評価、過去の東南海・南海地震の発生時期、強震動予測図等を用いて説明されました。また、その時に社会を支えるのは今の小中学生を中心とした世代であることが指摘されました。

その子供たちに何を伝えるかが重要であり、子供たちに伝える責任があるのは、家庭（親）であり、学校（先生）であり、地域（隣人）であることが併せ指摘されました。

2. 伝えるもの

地震防災のために重要な対策として、①建物の耐震性、②室内の地震対策、③いざというときのための準備が挙げられました。他方、以前の学校の地震対策は、地震が起きたら机の下にもぐること、防災頭巾をかぶって外に逃げること等であったことが述べられ、このため、今でも家庭で非常持ち出し袋の用意で満足している家庭が多いことが指摘されました。

今後、子供達に伝えることとして、①建物は地震に強く作ること、②家具は固定すること、③地震が起きたときは自助、共助が必要であること等が述べられました。また、子供は親の背中を見て育つことから、大人が手本を示すことの重要性が指摘されました。

家庭では、親が防災に関心を示すことが大切であること、家具の固定など室内の地震対策がとられていること等が例を示して説明されました。

学校では、学校の耐震性は大丈夫か、耐震診断をしているか、教室の TV、職員室のロッカー等の地震対策はとられているか、子供たちに地震防災の正しい知識を教えているか等が指摘されました。

地域では、非常時には近所での助け合いが必要であること、そのためには普段のつきあいが大事であり、顔を合わせる機会が重要であること等が述べられました。

3. 好奇心

子供は好奇心が旺盛であり、与えれば与えるだけ吸収することが指摘されました。この好奇心を育てるため、自然と触れ合うことや、地震防災に関するテレビ番組を見ること、

地域で開催されるシンポジウムやセミナー等に親子で参加すること、自由研究に地震や津波の仕組みを勉強するようにすること等が紹介されました。また、伊豆半島周辺の活断層や南海地震と関東地震の関係、濃尾平野と養老山脈等についても説明が行われました。

4. まとめ

最後に、子供に伝えたいことを大人が実践すること、家庭・学校・地域が役割を持っていること、建物及び室内の耐震対策を当たり前のこととして行うこと、自然とふれあい、地震と火山の文化を育むことが指摘されました。